

点から線、線から面へと波紋は広がり…

榎場 雅子

（臨床心理士・精神保健福祉士）

「新しいふれあい社会」が創刊されて 4 年、〈こころの電話相談室〉が開設されて 3 年を経ました。この間、1 度も休むことなく、両々相俟って続けてきたことをうれしく思います。これもひとえに、日頃からの皆さまとのふれあいが励みになったことと、感謝しています。更に、時を重ねる間に、「新しいふれあい社会」の読者間の連鎖も加わり、深く広いものになって、時間的にも事項的にも、点が線となり、線が面となり、その面も更なる広がりを見せております。

平成 29 年 4 月から「1 年生になったら…」と題し、新 1 年生の喜びと不安を、現在子育て中の母親から寄せられた実体験による感慨を、現在形で記してまいりました。特に私の胸を打ったのは、元中学校教師で、現在は認知症の姑の介護に当たり、高校 2 年と中学 2 年の二人の息子を育てている清水和子さん（仮名）からの感想と励ましと、真摯な要望でした。

清水さんは、在職中に生徒とわが子の高校受験指導に当たり、教師として、母親としての立場の葛藤に苦しんでいた折から、「新しいふれあい社会」（27 年 12 月号）で NHK 短歌投稿歌の
○ 親子から 親と子になる時がきて との一字のふくらみやまず

を引用して、「親子」をセットで考える関係から、「親」と「子」という関係に変化する時の父親の思いの深さを感じます、との一文に感動し、高校受験に当たって、本人の意思を尊重するように説いてきた体験をつぶさに語り、『老親の介護のために退職できても、子育ては退職できません。ましてや、「親子」から「親」と「子」になる、青年期真っ直中の、二人の子どもの母親として、その思いは強いものがあります。「1 年生になったら…」をもう一步進めて、青年期の問題について年代を追って教示していただけませんか、市民の一人としての心からのお願いです』、と 1 時間余に及ぶ真摯で謙虚で熱い要望でした。その底に教師魂は失われていないと、感じました。

このように偽りのない個々の相談（点）は、同じような悩みを持つ母親の共感を呼び（線となり）、更に心ある人の問題意識を呼び起こし（面となり）、社会問題と重なって、面が広がってきたと、大きな喜びとしています。

その好事例として、県立高校定時制教諭、黒岩達彦さん（仮名）の独自の実体験を踏まえた上の真摯な要望と相談、更に進んでの問題提起を、本人の言葉のままにご紹介します。

最初に私の「ひきこもりからの再生」とでも名付けたい実体験からお話します。

私は県立高校 2 年の時、推されて学級委員になりました。ところが、受けてから気付いたことにクラスはみんな勝手放題で、注意すると、「いつの間に先生の手先になったのだ！」と揶揄される始末でした。すっかり自信を失い友だちが信用できず、お決まりの不登校から、遂にはひきこもり状態に陥ってしまいました。

心配した両親は、メンタルクリニックへの受診を勧めてくれましたが、「聞く耳持たず」の状態でした。この際も学校からは何の連絡も指導もありませんでした。母親は独りでN心理療法研究所を訪ねて相談しました。N先生は、この期のひきこもりは自分の精神状態の異変を否定しているか、無関心を装っているが、頭の片隅では困ったことだと、思っているはず。お母さんが相談に通っていることを正直に伝えて、やんわりと、根気よく、一緒に行ってみないかと勧めてください。いつしか心がほぐれて「僕も行ってみようかな」と言い出すことがあるものです、と言われたそうです。

私はひきこもって1年半、かつてのクラスメートの誰それが、大学に進むとか、就職するなどの噂が耳に入ってくると、尻に火がついたような苛立ちを感じて、まんまとN先生の作戦に乗ってしまい、母と一緒に先生を訪ねました。

そして「私は高2の夏からひきこもって1年半になります。高1を入れると失った時間は3年になります」と訴えました。先生はいとも簡単に「それならその3年を長生きすればいいじゃないか。君は、ひきこもっていた間を、“失った時間”と表現している。その力をもってすれば、十分可能なことだと思うよ」と言いました。

この言葉に発奮し、定時制高校で学び、大学二部に進んで、教師の資格を取りました。そして、自ら希望して定時制高校の教師になりました。定時制は、全日制で学校の環境に馴染めず退学した生徒、非行行為などにより退学を強制された生徒など、多くの問題を抱えた生徒たちの、受け皿になっています。全日制で不登校からひきこもりを体験し、定時制で学び、モラトリアムの恩恵にも与った私にとって、適職に巡りあえた思いがしています。その私にとって、「新しいふれあい社会」(8月号)は、この上ない教科書として、座右の銘とさせていただきます。

ところで、ごく初歩的で素朴な質問ですが、小中学校の義務教育の間は、ひきこもりについては、いじめ、不登校と並んでというより、その延長線上の問題として、学校としても深刻な問題として、保護者とも話し合い真剣に考えます。ところが、高校生になると、私の場合もそうであったように、学校はほとんど家庭任せ、最終的には退学もやむなしという態度です。それでよいのでしょうか？ 定時制には、その問題を引きずった生徒もいます。それは、定時制なるが故のことでしょうか？ と大きな問題をつきつけられました。

今さら説明するまでもないことですが、この期は、自己同一性の達成の迷いの時期といわれて、〇〇家の子ども、△△高校の生徒という集団の中で、安心感が与えられ、共通した価値観を持ち、役割を担うことで、人格的な同一性が出来上がっていきます。あるべき自分の姿を、確立していく時期です。ところが、自分の可能性を信じられず、社会(学校社会を含め)を前にして立ち尽くす、いわゆる「同一性拡散」と呼ばれる現象が、「ひきこもり」という形で表現されます。ところが、「高校は義務教育ではない」との理由から、この件については全面的に家庭に委ねてしまっているのではないのでしょうか。その是非はさておいて、この時期こそは、家族療法という「家族と治す」ときです。ご自分の家族のことを思い起こしてください、とストレートに伝えました。

Tさんの話はなおも続きました。

私の担任している生徒にも、引きこもりの経験を持つ生徒が何人かいます。私の過去を知って、「前の学校(全日制)のときは、こんな話は友達にも先生にもできませんでした。兄貴と違って、聞いてください」と言い、「僕は卒業後のことは全く見えません。5年先の自分の姿が全くイメージできません」と話してくれた生徒がいます。頭を打たれた思いでした。

自分の可能性を信じられずに、社会の前に立ち尽くす。全く私も同じでした。それはまさしく同一性拡散状態ですね、と私の言葉を繰り返し、理解を示してくれましたが、暫らく言いよどみ、それにしても、なぜ兄貴でしょうね。教師は煙たい存在なのではないでしょうか、と訴えられました。

おっしゃるように、この時期（高校時代）は、自己同一性の達成に迷いがあって、対人関係に距離が取れにくく、離れると寂しいのに、近づくと呑み込まれるような恐怖感を覚えて、孤立することが稀ではありません。自分の中で、身近に親しく憧れにも似た思いで、架空の集団への同一性を確立して、仮の安定を得ようとしています。その対象に、例えば「ひきこもりを考える会」など、想像上の集団、先生と同じ土俵で、共に考える仲間となることで、安心を得ようとしているのではないのでしょうか。無名・平等を旨とする自助グループ的発想で考えると、理解できる気がします。「ひきこもりを考える会」のT兄貴になってあげてください、と伝えました。

実は、私は兄貴と言う言葉にこだわりがあって、暴力団や非行者のグループなどの悪徳社会的な集団で使っているようなイメージがあり、その集団への参加により、同一性を確立しているような印象がありました。その印象が一度に吹き飛んだ思いです。「ひきこもりを考える会」のT兄貴、いいですね。東葛市民後見人の会の相談室もこの会を見守る顧問として、これから後も気軽に相談させてください、と明るい声が返ってきました。

それから4カ月を経て、年も替わって2月半ばになったのでした。少々はにかんだ様子で、「ひきこもりを考える会のTです」と名乗って、電話がありました。

昨年（平成29年）3月、福井県池田町で起きた高校2年の男子生徒の自殺事件に関し、人々の印象から薄らいできていますが、その原因が、教師（担任、副担任）による、厳しい叱責、罵倒に耐えかねてのことと明らかにされて、“指導死”などという言葉が、知られるようになりました。

或る調査によれば、指導死は過去10年の間に37人に及んでいると報道されています。しかし、その報道は、あまりにお粗末で、私の知る限りでは、NHKと民放一社が、さらりと報じただけで、深刻味のないものでした。マスコミも意図的に、この重大な件を避けているのでしょうか。

「新しいふれあい社会」（11月号）で、メニガーは「自殺行為には、①殺したい、②殺されたい、③死にたい、の3つの願望が潜んでいる。青年は①が強い。殺したいほどの憎しみを抱く相手は、親や兄弟、教師、友人などで、敵意を表現できず、愛と憎しみの間で揺らぎ、憎むことに罪悪感を覚え、殺したい願望は、殺されたい願望に急転化して、自殺に及んでしまう。そのため、自殺行為には、他者へのアピールがある」と説いています。私は、この個所にアンダーラインを引いてあります。「このペンの力をもって、指導死のことを世に知らしめてください。問題提起してください」、と一気に訴えられました。訴えというより、問題提供であり、意見であり、要望でした。

あまりのショックに、「貴重なご意見ありがとうございました」と答えるのが精一杯でした。その上で、青年の場合、自殺したい心理状態は一時的です。時がたてば落ち着きます。救いの手が差し伸べられれば、自殺を防ぐことができるのです。魂の叫びを受け止めてくれる相談相手が必要なのです。孤独は、青年を追い込みます。家族や友人関係が保たれていることが大切です。豊かな人間関係こそが、青年の屈折や救いのない状態を緩和します、と率直に伝えました。

〈こころの電話相談室〉

心の悩み、心のケア、心の健康に関する電話相談室をご利用下さい。

相談日 毎週木曜日 午前9時～午後9時

相談担当 榎場主任相談員 電話番号 04-7100-8369 個人情報厳正に取り扱います。

〈編集後記 mission accomplished—無事に任務を完了しました〉

独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業として、4年間で通算134ページに及ぶ「新しいふれあい社会」を通じて、社会や家族が抱える複雑で困難な問題を提起してきました。〈こころの電話相談室〉では、読者（相談者）と筆者（相談員）の間で約350件に達する真摯な相談・意見・対話が交わされました。

特に、29年度は学校におけるいじめ、ひきこもり、自殺、さらに家族危機などの相談や問い合わせが殺到し、8月号で子供の成長過程における「青年期の体と心の迷い、そして家族」と題した8ページの特集号を世に問いました。さらに12月号では、「学校はワンダーランド」と題して日本の未来を担う子供たちへの深い愛情と学校・教師への強い信頼と期待を滲ませました。

こうした望外ともいえる反響は当会にとっても驚きと緊張と喜びの連続でした。まるで池に投じた一石が大きな波紋を生み出すように、反響が反響を呼び、点から線、線から面へと広がっていきました。手許には多くの貴重かつ詳細な活動記録が残されました。これらは、まるで天職とでもいうように、淡々と任務をやり遂げた一人のゲートキーパーによる社会への復命書なのです。

そこから私たちは3つのことを学びました。

第1に、親と子が真摯に向き合うことで、どんな家族の困難や危機でも乗り切れるという強い確信です。健全な家族・家庭の持つ自助解決力を実感することもできました。

第2に、学校教育以前に基本的な躰を教える場である家庭教育の重要性です。世に出る前の準備として、子供に対する規範や規律教育の大切さを問題提起するきっかけにもなりました。

第3に、「家族が一緒になって危機に対決すべき大切な時期」を逸すると、事態は悪化の一途をたどるばかりです。経緯は長期化して、本人にも、家族にも、ひいては社会的にも、困難な状況をもたらします、という筆者の厳しい警告が心に強く響きました。

当然のこのように、そこから新たな任務が生まれました。

不幸なことに、小中学校時代のいじめや社会人になってからの職場のパワハラが原因で、心の病を抱える精神障害者やひきこもり当事者が数多く存在することも現実です。我孫子市内のひきこもり当事者は少なくとも500人以上と推計されますが、これらの社会的弱者に対する相談・支援体制は決して十分とはいえません。このまま放置すれば、いずれは重度の統合失調症、自傷・他害行為に発展し、家庭崩壊などに追い込まれます。そこで、29年度からこれらの精神障害者やひきこもり当事者、「親亡きあと」の障害者及びその家族の社会的孤立を防止するための支援策として、アウトリーチ事業を試行しています。さらに30年度以降は我孫子市公募補助事業として、これらの公的機関では対応しきれない制度の狭間にある生活課題の解決にむけて本格的に取り組む予定です。

最後に、4年にわたり本誌をご愛読いただきありがとうございました。今後、「新しいふれあい社会」は会員向けの会報として再出発することになります。〈こころの電話相談室〉については引き続きのご利用をお願い申し上げます (h)。

(独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業)